

NEW
WAVE

じやぱん・るねさんす

俗曲師・うめ吉が伝える日本文化

うめ吉さんのことをこの記事で初めて知った人でも、日本人であれば、彼女の曲を聴くと「自分はこの人のことをずっと前から知っていた」と感じるのではないだろうか。懐かしくもあり斬新な音楽を紡ぐ、俗曲師・うめ吉さんの魅力に迫る。

* 俗曲師(ぞつきよくし) — 落語の合間に演じる色物芸人の中で、戦前の流行歌・都々逸・端唄などのレパートリーを三味線を弾きながら歌う芸人。



日本人であれば
こういう音楽を受け入れるのに、
特に教養はいらないと思います。



東をどりとのお会い 俗曲師・うめ吉の誕生

着物姿に日本髪のアーティスト。三味線の弾き唄いで年配の邦楽ファンのみならず、若者にも強烈なインパクトを与えるうめ吉さん。古きよき日本のお座敷三味線芸をベースにした三味線エンターテインメントは、懐かしさと同時に新鮮さにあふれている。

ライブでは、三味線一本で歌う「山中節」から、豪勢に盛り上がる「東京ブギウギ」まで、幅広い曲目が披露される。

うめ吉さんは自らのことを「俗曲師」と呼ぶ。日本文化を我々に思い出させる彼女は、いわゆる伝統芸能の王道から少し外れたところに誕生した。

俗曲師・うめ吉が誕生する初めの一步は、東(あずま)をどりにあった。

「東京に出てきて、新橋の芸者さんたちの東をどりというのを見て、ものすごい衝撃を受けたんですよ。『私って日本人じゃないんじゃないか』ってくらい。それで自分も『芸者さんになりたい』と思って、親に相談したんですけど、大反対されて(笑)」

しかしなんとか日本文化に携わるよう試行錯誤をくり返しているうちに、寄席のお囃子になれる道を発見する。そして国立劇場の

寄席囃子研修生となり、2年間研修したのち落語芸術協会所属のお囃子連として、落語家のお囃子を三味線で弾くようになる。つねに「行けばなんとかなるだろう」と思って飛び込んでいったという。

東をどりに出会う前の、実家で過ごした日々が、純邦楽の素養を育んだのだろうか。

「いいえ。うちの両親はまったく趣味がない人で、日本文化に対するこだわりなどありませんでした。東京に出てきて、東をどりに出会うまでは、まったく無関係に過ごしていました」

ところで、どうして名前が男性のようなものなのだろう。

「昔は芸者さんの名前は『市丸』とか『勝太郎』とか、みんな男性の名前をつけていたんですね。いつか男性しか芸をやっちゃいけないというような時期があったそうで、それからそういうふうになったようです」

伝統芸能に入門するのは、敷居が高いように思う。しかしうめ吉さんは「昔と違い、今は誰でも入門できる場所もあります」と言う。

「伝統芸能の家庭に生まれきた人のほうが大変だと思います。私はよそののだから気楽にやれたかもしれません。どうしてもやらなくてはいけないという運命を背負っているわけではないので」

PROFILE

うめ吉 Umekichi

岡山県倉敷市出身。国立劇場の寄席囃子研修生を経て、落語芸術協会所属の「お囃子連」となる。松山さくらに弟子入りし、「俗曲師・松山うめ吉」の名で2000年、寄席芸人デビュー。2006年、全米5都市8カ所のツアーを実施。7月には「フジロックフェスティバル」に出演するなど、その人気は幅広い層に広がりつつある。



WEB

<http://www.satoh-k.co.jp/ume/>

ライブ情報

- 2006年12月13日(水)
会場: daikanyama 晴れたら空に豆まいて
問合せ: DISK GARAGE 03-5436-9600
- 2007年1月14日(日)
会場: ハーモニーホール座間(大ホール)
問合せ: ハーモニーホール座間 046-255-1100
- 2007年1月18日(木)
会場: 船橋市民文化創造館
問合せ: 船橋市民文化創造館 047-423-7261



CD album 「今昔うたくらべ」
メジャーデビュー第一弾アルバム。全13曲入り。
3,000円(税込)

CD single 「お座敷小唄」
全5曲入り。アメリカツアー映像を収めるDVD付き。
1,800円(税込)。

DVD
「うめ吉今昔うたくらべライブ2006～at 渋谷DUO MUSIC EXCHANGE～」
「うめ吉&おてもと社中&ことぶきシスターズ」のライブ。3,980円(税込)

初の書き下ろしエッセイ、「俗曲師
うめ吉のニッポンしましょ!」毎日
新聞社より12月15日発行予定

昔の音楽のほうが 自由にノリがよかった

うめ吉さんが披露する音楽は、単純に楽しいし、ノリがいい。正統派の「お座敷小唄」のほかに昭和歌謡やジャズの「リミックス」が加えられていて、単にレトロ趣味でない、実験的な挑戦を盛り込んでいる。

「今、純邦楽としてやっていらっしゃる方とベースは同じようにお稽古しているのですが、もっと過去に溯って再生しようとしています」

うめ吉さんは古いSPレコードを探し、音源そのものを聴いて稽古をしている。

「譜面だけを見て、レコードを聴かないと、抜け落ちるものがすごく多いので」

明治時代のレコードなどには、江戸時代に生まれた人の演奏が残っているという。

「そういうレコードを聴くと、こんなにかっこいい音楽をやっていたのに、私は何をやっているんだろう、と思います。すごくステキで、日本人があこがれる日本人ですね。」

江戸時代のこういう音楽って、今のJ-POPの原点なんだと思います。昔の流行歌で、庶民がふつうに口ずさんでいたんですから」

日本の流行歌としてイメージするもののひとつに演歌がある。しかしうめ吉さんが「かっこいい」と思う音楽は、それとは違うようだ。

「演歌はすごく新しい音楽で、江戸時代からある音楽とは、まったく違うジャンルだと思ったほうがいいのかもかもしれませんね」

その違いはうめ吉さんによると「自由さ」と言う。

「三味線音楽にはもともと音符がないですから、すごく幅が自由です。音符にも間にも、伸び縮みとかの立体的な余裕があって、いろんな空間に遊べる自由さがあります。ちゃんときれいに弾く今の音楽のほうが、自由さは少ないんです」

なぜ日本人は日本の よさを見失ったのか？

「例えば映画でも音楽でもそうなんですけど、日本人はこんなにリズム感がよかったのにある時期で失われてしまった、と感ずることがいっぱいあります」

その原因はやはり教育にあると、自身戦後教育の中で育ったうめ吉さんは考えている。

「戦後すぐはまだよかったんですが、アメリカの文化が入ってきて、音楽教育も全部西洋的になって、日本人がせっかくなにもってきたい味とか間が一回そこで消えてしまったと思います。」

昔の音楽には、日本人独自の自由な発想のなかで弾いて、ちゃんとノれるものがあるんです。私達はそれを知らないんです。戦後、

西洋音楽のスタンダードで音楽が判断されるようになって、私達は邦楽ってつまらないものだって思いこんでいるわけです」

うめ吉さんの活動は、外国人にとってさまざまな刺激を与えている。2006年、5都市8カ所のアメリカツアーを成功させた。

「行く前には、受け入れてもらえるんだろうか、とかいろいろ考えました。けど実際やってみると、むしろ、日本人にしかわからないような曲で地味なことをやったほうが反応はよかったです。日本人にとっては懐かしいですけど、アメリカ人にとっては新鮮ですから」

「お座敷芸が宿す、江戸時代の粋の文化」の再発見。それを現代音楽に結びつけるうめ吉さんは、じつはあでやかに見えて「骨太」なのかもしれない。伝統を死守しながらも、同時に型をやぶる「新しさ」。これこそが文化の再生ではなからうか。

「自分が東をどりを見て、日本を再発見したように、自分のライブや寄席を見ていただいて、着物が着てみたいとか日本舞踊を習ってみたいとか、日本文化のとっかかりとなるお手伝いができればいいな、と思っています」

Text by : 浅井ハル